

2009年12月13日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：イザヤ書 49 章 7～13 節

説教題：悩む者をあわれむ神

1 イザヤの時代

主の御降誕を待ち望むアドベントの第三週目に入りました。今朝はイザヤ書を開き、主が人となって来られたことの恵みをもう一度覚えていきたいと願っております。

イザヤが預言者として活躍したのはイエス・キリストがお生まれになる、およそ七百年前の頃と考えられています。その頃イスラエルは、どんな時代であったのでしょうか。かつてダビデがイスラエルを統一しました。ところが、時代が下っていくうちに時の王たちはイスラエルの神ではない、外国の神々を拝むようになっていきます。その結果、徐々に国が乱れてゆき、力を失っていく。とうとう南と北に分裂してしまうまでになる。周りには当時最大の勢力を誇っていたアッシリヤという国があって、みな不安と恐れを覚えていた。イザヤはそのような時代に、もう一度聖書の神に立ち返るようにと神の御言葉を語り続けました。やがて救い主が来られて、私たちは救われていくのだからと希望のメッセージを語るのです。

日本の歴史で今から七百年前と言えば鎌倉時代の終わりあたりです。はるかに遠い昔という印象です。例えてみればイザヤがしたことは、電気もケータイもない鎌倉時代に、七百年後のあなたがたが離れた所にいる人と自由に話をすることができますと言ったようなものです。当時イザヤが語ったことをどれだけの人か理解したのかはわかりません。しかし今私たちが読みますと、確かにイザヤをとおして主が語ってくださったこ

とはそのとおりに実現していったのだと知ることができます。

2 「あなた」

(1) 誰のことか

さて 7 節にまず目を留めてまいります。「イスラエルを贖う、その聖なる方、主は、人にさげすまれている者、民に忌みきらわれている者、支配者たちの奴隷に向かつてこう仰せられる。「王たちは見て立ち上がり、首長たちもひれ伏す。主が真実であり、イスラエルの聖なる方があなたを選んだからである。」

ここに「あなた」とあります。この「あなた」とはいったい誰のことなのか。私は、最初にここを読んだときお恥ずかしい話ですがわからなかったのです。ここに「人にさげすまれている者」とか、「民に忌みきらわれている者」、あるいは「支配者たちの奴隷」とあります。私は、てっきりこの「あなた」とは「そういう人たちのこと、つまり私たち弱い者たちのことを指しているのだろう」と考えました。そんな弱い私たちに神が「あなたを選んだ」と言ってくださっているのだろう。この 7 節から 13 節はみな、神が私たちに対しての約束を語ってくださっている。そう読んでもなんとなくつじつまが合うような気がしました。しかし調べていくと、どうもそんな単純なことではないらしいことを教えられていきました。

どういうこか。そのことを確認するために、同じイザヤ書の 42 章 3 節の所を開きます。

「彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶ

る燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。」マタイの福音書によれば、この「彼」というのは、イエス・キリストのことを指すとはっきりと書かれています。そしてこの42章の所と49章は、実は並行関係にある。つまり、同じ方のことを別のことばで表現している。そういう関係があると教えられました。

もう一度49章に戻って、では「あなた」とは誰を指すことになるのか。42章と49章は同じ方を指すと言うことになりますので、二千年前に人となってお生まれになった救い主イエス・キリストを指すことになります。

私がそのことを知ったとき、正直に言えば少し落胆しました。「私の聖書を読む力はこんな程度か。」まことに浅はかな感情です。もっとはっきりとこの「あなた」とは救い主を指すと言ってくれればすっきりとするのに。どうしてこのようにわかりにくい表現をするのか。本当のことがわかるまで無駄な時間をとられてしまった、とちょっと腹が立ちました。

しかし、少し落ち着いて考えていきますと、これは決して無駄なことではなかったと気がつきました。この「あなた」が誰であるのか。どうしてイザヤがわざわざわかりにくい言い方をしたのか。きちんとした意味があることに気がついたとき、これは実は恵みのみことばであったことに目が開かれていきました。

(2) わたしたちと全く同じ姿になられた方

「あなた」とは今言ったとおり救い主イエス・キリストを指します。その救い主がどのような方ですか。「人にさげすまれている者」と言われます。「民に忌みきらわれている者」

です。「支配者たちの奴隷」とさえ言われています。

私たちの所に来られた方は、神のひとり子でありますから、もともとは人にさげすまれるようなお方ではありません。奴隷でもありません。けれども、この方は自ら進んで積極的に人にさげすまれる者となりました。ご自分はこの世界の支配者であるのにもかかわらず、逆に奴隷の立場となりました。具体的に言えば、何も罪のないお方であるのにもかかわらず、十字架で処刑されていく。支配者たちの奴隷という意味では、これ以上のない奴隷の姿です。

ここにある「あなた」が誰を指すのかわかりにくいと言いました。どうしてわかりにくいのか。合点がいききました。イエス・キリストが、私たちと全く同じようになってくださったから。「あなた」というのが、「それは私たちのことだ」と勘違いしてしまうくらい、主は全く同じようになられた。だから最初読んだときに混乱して当然だったということになる。

そのことに気がついたとき、私は最初の腹立たしさを忘れました。逆に嬉しくなりました。これほどまでに主が低くなられて、私たちと一緒にさげすまれる者となってくださったこと、忌みきらわれる者となってくださったこと、奴隷の中でもっとも大変な奴隷のお姿になってくださったことを喜ぶことができました。

3 救い主

(1) 「出よ」「姿を現せ」

主は父なる神から選ばれ、私たちのところに遣わされてまいりました。その救い主である方はさまざまなことを私たちにしてくだ

さいますが、今朝はその中から三つのことを取りあげます。

一つめは9章にあります。「わたしは捕らわれ人には「出よ」と言い、やみの中にいる者には「姿を現せ」と言う。」

私たちは自分のことを「捕らわれ人」であるとほとんど感じることはありません。ときどき会社で働いている人が、「自分は会社の奴隷だ、捕らわれ人だ」と言うことがあります。しかしどんな人でも会社を離れれば、自由に過ごすことはできます。ですから、ほとんどの方は自分は自由であると心の中では考えているはずですが、でも本当に自由なのか。いつも言いますが、私たちは自分で思っているほど自由ではない。いや、深刻な奴隷状態にあると言わざるを得ない。

昔ある本を読んだらこんなことが書かれていました。「進歩とは何か。それは、人間が理不尽なことで苦しむことがないように、その原因をひとつひとつ減らしていくことだ。」なるほどと思いました。確かに科学技術のおかげで生活は便利になりました。私が子どもの時は、井戸から水を汲んでいました。水を汲むのは子どもの仕事です。冬は大変でした。寒いし、足もとが滑る。井戸に落ちるのではないかと恐い思いもしました。それが今は蛇口をひねれば冷たい水も、熱いお湯も簡単に出てくる。これは確かに進歩でしょう。そういう意味では昔に比べれば理不尽な苦しみは減ってきました。お金さえあれば、便利なものをなんでも手に入れられる時代です。では、理不尽な苦しみは全くなかったのでしょうか。そんなことはありません。私たち全員が例外なく苦しんでいる理不尽なことがあります。それが人の死です。自分はいつか死んでしまう。家族が死にかけている。

いや、取り返しのつかない事故で人を死なせてしまった。愛する者を病や事故で失った。みんなこの死ということで苦しんでいる。

これに対して、人が死ぬのはあたりまえなのだからしょうがないと言う方もいるでしょう。ところが聖書によれば、人が死ぬということは大変な異常な事態なのです。本来はあつてはならないことが起こっている。だから私たちは死というものに捕らわれているのだと言うのです。どうしてそんなことになったのか。神のみこころに背き、神に罪を犯した結果です。

そのような私たちに対して主は「出よ」と声をかけてくださるとあります。やみの中にいるものには「姿を現せ」と言ってくださいます。私たちは罪という塀の中に閉じこめられているのですから、自分の力で出て行くことなどできません。死というやみの中でどうすることもできずに悲しんでいたのです。

ではいったいどのようにして主は私たちを死という奴隷状態から解放してくださるのか。どのようにしてやみの中から私たちを連れ出してくださるのか。なんと主ご自身が捕らわれ人になってくださった。具体的に言うと、主は十字架で死んでくださって、死という奥深いところまで降りてきてくださって、私たちを解放してくださる。光などここにもない本当の真っ暗闇の中にまで主は降りてきてくださって、私たちの手をつかんでくださる。そのようにして私たちを連れ出してくださいませ。

(2) 導く

私たちはかつて神に対してひどいことをしてきました。今でもひどいことを繰り返してしまう私たちです。普通なら医者がとつく

にさじを投げてしまう治る見込みのない患者というようなものです。ところが、神は私たちがどんなにわがままのし放題であってもあきらめません。人生の中でただ一度「救って欲しい」と願ったその祈りを神は忘れることはありません。その後で私たちが「でもやっぱりこの世のことを楽しみたい」と言ったとしても、神はご自分の決心を思い直す方ではありません。そんなことは最初からわかっています。

主は、わがままのし放題の私たちを熱心に忍耐強く導いてくださるので、安心していただきたい。9節の後半で「彼は道すがら羊を飼い、裸の丘の至る所が、彼らの牧場となる」とあります。今の私たちの目には、全く何も生えていないごつごつした岩だらけの荒地に見える丘が、やがて羊が草をはむくらいの豊かな牧草地に変えられていくということです。きょうは羊の群れをどこに連れて行こうかと悩む必要がない。あらゆるところが緑豊かな草原になる。食べるものはどこか、水はどこにあるのか、暑さ寒さをどうやってしのごうか、そんな心配をすることがない。というのは、主が私たちがきちんと水の湧くところに連れて行ってくださる。神が私たちを救っておいて、後は知りません、後は自分の力で生きてくださいと言うはずはない。神が私たちを救ってくださるといふのなら、私たちのすべての生涯にわたって神が責任を持って最後の最後まできちんと導いてくださる。そういう約束をしてくださいます。

そのような約束があるから、天も地も山々も喜んで歌うことができる。いや、私たちが心の底から喜べる。それだけのことを主はしてくださるということです。

(3) あわれむ

どうしてそこまでしてくださるのでしょうか。そもそも私たちは神に対して大変なひどいことをしてきたのではないですか。大変なことをしたのなら、それに見合うくらいの厳しい罰を与えて懲らしめるはずではないですか。神とはそのように恐ろしい方だと考える方もいます。確かに神は公平なお方なので、曲がったことはまっすぐにされる方です。

しかし、この方はまたあわれみの神でもあります。苦しんで悩んでいるものをご覧になると、神は何もお感じにならないのではない。いや、私たちが涙を流しながら悲しんでいるとき、神も涙を流して悲しんでくださる。神も私たちの苦しみを一緒にしてくださる。神が私たち痛みをともにしてくださるので、どれほど私たちをあわれんでくださる神なのでしょう。本来なら私たちが苦しむべきことを、神が十字架で苦しんでくださる。神が私たちの負うべき罪の罰を引き受けてくださる。

二千年前、イエス・キリストが人となって来られました。その光景を思い描いて、私たちはお祝いをしようとしています。しかし私たちはもう一つのことを思い出さなければなりません。この方は、私たちのためにどのようなことをしてくださったのか。私たちのことをどれほどにあわれんでくださっていたのか。私たちを慰めるために、どれほどの犠牲をささげてくださいましたのか。自分自身の姿をふり返ればふり返るほど私たちは神のあわれみをいただくなどふさわしくありません。ふさわしくないけれども、神はそうされます。私たちをとらえて放そうとしないのです。

主は、人からさげすまれる者となるために

来てくださいました。主は、民に忌みきらわれる者となるために来てくださいました。主は、奴隷の中でももっともひどい状態の奴隷となられるために、二千年前、私たちのところに来てくださいました。

もう一度クリスマスの恵みを覚えたいと願います。